文芸

短編 息子（２）

十市梨夫

だが百姓をすると決めたからにはあの人との交際もこれで終るだろう。それも仕方がない。それならいっそきょう会ってさよならを言ってしまおうか、そう思いたつと止めようがなかった。折よく隣席の沢田もいなかったので、かれは急いで電話のダイヤルを廻した。電話はすぐ返ってきたが、道子はいなかった。四時頃社用ででていったが、きょうはもう社へは帰らないだろうとのことであった。

省一は退社するとO町の通りをゆっくりと歩いた。年の瀬が迫ったので街はすっかり活気づいていた。灰色の暮色は北の山脈のひだにたゆとうていたが、街にはすでにネオンの海が展けていた。その光の海をひっきりなしに人が通る。疲れた顔が家路へと急ぐ。若い二人連れが肩を並べて通る。学生達が元気な足どりで駈け抜けてゆく。いつも見馴れた風景である。しかし、こうした繁雑さもまもなく自分の視野から消え去るであろうとかれは思った。

大丸の巨大な建物が夕空にくっきり浮きあがって見えた時、かれは街角を右手に折れた。母に買物を頼まれていたのを思いだしたからである。この近代的建築は雑な人間を間断なく吸いこんだり吐きだしたりしている。その人波に眼を当てた時、かれは思わずあっと叫びそうになった。同僚の沢田がでてきた。つづいてでてきたのは道子ではないか。急いで建物の陰へ身をよけた。道子が沢田と親しくしていることは一度も聞いたことはないが、沢田は街の物持ちの息子で、甚だ聡明でもあるし、いささかの傲慢さを除いては申し分ない好青年である。会社を辞めてしまったなら沢田と対等に競争できる何ものも自分にはないとかれは思った。道子は格別たのしげな表情もしていなかったが、二人はかれがいまきた道をO町の通りへ折れていった。かれはぼんやり見送っていたが、やがて近くのバーへはいっていって酒をくれと言った。

翌日は土曜日であった。省一は出社したものの昨夜の打撃と、やけに飲んだ深酒の名残りがまだ頭の芯に淀んでいて変に物憂かった。辞めるとなると仕上げておかなければならない仕事が山ほどあるが、それも手につかない。きょうは退社後課長がどこかで一席儲けると言っていたが、もうそんなこともして貰いたくない。第一その課長は朝から顔を見せなかったが、次席から課長は出張したと聞かされた時には、ほっとすると同時に一抹の淋しさがきた。すべてがこの儘で終るのだと思った。すると退社間際になって思いがけなく道子から電話がかかってきた。兄は急用ができてけさ早く松山へいったが、兄からの言伝てを頼まれているので会いたいとのことである。一時にT会館のバスの待合にいて欲しいというのがすこし変に聞こえたが、断る理由もなかった。どんな顔をして応待するか見てやろうとも思った。

省一が昼食をすませて一時きっかりにT会館の横手へきてみると道子はもうそこに立っていたが、かれを認めると持っていた二枚の切符を示して眼で合図すると折柄改札の始まったバスの方へ歩いていった。どちらも口をきかなかったが、車は竹林寺行である。年末のためか、さすがに乗客はすくなかった。二人はならんで腰をおろした。道子は相手の固い表情に気がついていた。先程かれを認めた時眼で笑って見せたが、その場のありたけの彼女の好意を男は受けつけなかった。会社を辞めることでこの人はすっかり心を重くしているにちがいないと思った。

「会社をお辞めになるそうね」気の毒な気がして泌みるような口調になった。それに対して男は

「ああ」と短かく答えたが

「課長からの言伝てってなんです」とぼつんと口を割った。

「そのことは公園へ行ってからゆっくり話しましょうね」いかにも大事なことを話されている言い方であった。それきり二人は口をつぐんだ。

バスは北側の傾斜をのろのろと登ってゆく。北の山脈はまだ雪を冠っていないが、うつくしい眺めである。かれらは一度もこのようにしていっしょにこの山へ登ったことがなかった。省一はふと道子の横顔に眼を当てた。形のいい耳がある。いつもの清潔な頬の輪郭である。幾分眼を臥せているのか長い睫毛が揺れているようである。この人は車に弱いのではないかと思った。

バスを降りると二人は展望台の近かくへ歩いていって南面の岩を背にした陽溜りへ腰をおろした。すぐ眼の下には浦戸湾が小さなさざなみを織っていた。湾内の埋立工事はどんどん進捗していて、かっての絵のような風景はすっかり害われた感じである。しかし対岸の街の喧噪とはおよそ縁遠い静けさがそこにはあって、周りの山々の陰影と空に流れる雲をうす濁った水が写していた。

「兄さんの言伝ってなに？」対い合って坐ると省一がまた言った。

「言ってもむだらしいわね、きょうのあなたはとても頑固でわたしのいうことなどてんで聞き入れてくれそうにないから」

「どうでもいい用件でぼくを此処まで連れだしたという訳か」

「ご迷惑だったかしら？」言ってから道子は微笑した。釣られて男も笑った。これで道子はいつもの調子を取戻したようだが、男の方はそうはいかない。

「君は沢田君をどう思っている」とすこし意地悪く言った。

「どうしてそんなことをお訊きになる」道子は訝るような眼を省一に向けた。

「昨日夕方君達が連れだって大丸からでてくるところを見かけたからだ」ずばりと言ったが道子はそれほど愕きもしない。

「見ていたのね、見ていてどうして声もかけてくれなかったの。そんなの意地悪よ。大丸で買物をしていると声をかけられて、誘われると断り切れなくて困っていたのに」道子はちらと男を見て長い睫毛を臥せた。

オリンピックによせて

市スポーツ振興審議会長　沢村武一

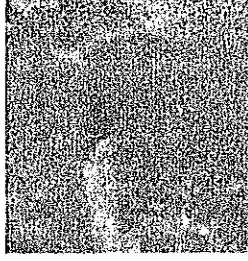
オリンピック大会での表彰式は、競技種目の終わったときその種目の行なわれた場所で次の方法で行なわれる。すなわち、第一位、第二位及び第三位となった競技者は、スポーツ服を着てフィールドに設けられた表彰台上に立ち役員席に向こう、優勝者は、その右側に並んだ第二位の者及び左側に並んだ第三位の者よりは少し高く位置を占める。優勝者の国の国旗は、中央の旗竿に、また第二位と第三位の受勝者の国の国旗は中央の旗竿に近く右側と左側の旗竿に掲揚される。優勝者の国の国歌が吹奏される間は、三競技者と観衆はこれらの国旗に注目し、終わって国際オリンピック委員会会長あるいは会長の指名する委員会委員より撤欖の冠と一位に金メダル、二位銀メダル、三位銅メダルが夫々授与される。

待望の日章旗は、オリンピック大会第四日の走巾跳の決勝においてわが田島直人選手が七米五十二を跳んで第三位の成績をあげ跳躍日本の名誉を先づ守った、田島選手は、ロスアンゼルス大大会で六位であった自分の記録を更新した。

欧州の地で日章旗の空高くあがる最初の光景に接し強い感激に思わず涙を催した。

大会第五日の棒高跳には、西田修平、大江季雄、安達の三選手が出場し、ベスト六位までで行なわれた決勝戦には、三人が残った、バーの高さ四米二十五にあげられ、これを越したのは、わが大江、西田と米国のメドース、セフトンの四人の選手となり、日米優勝の争闘戦が展開され、四米三十五を争うこととなり、これを越したのはメドース一人となり、優勝は決まった。残り三人で二位、三位を争ったが、わが西田選手が二位、大江選手が三位となった。棒高跳は時間をとる競技であるので日の永い真夏の競技場にも夕暗が迫って来た、しかし観衆は少しも去らない、その中でメインマストには、二本の日章旗が翩翻としてひるがえた。

尚安達選手も六位に入ったので三人揃って貴重な得点スタンド席で応援していた日本人の意気は益々あがった。（未完）



これは不思議

十市の西端にある客寺の境内には〃潮の満干の手洗鉢〃というのがある。石灰石の露頭にあって、写真のような壺状のもの。長さ四十センチほど、深さこの半分とみられるくぼみで、潮が満ちてくると水がわき、引いて行くと水が減るという。ところで海水のあるところは、ここから南約三百メートル。山の高さは八十メートルというところ。まさに南国市切っての〃現代の不思議〃である

綜合堰と茂久川（７）

後免と農用水

南海虚子

◇国境の町後免をめぐって水ゆえの歓声がきかれだしたのはどうしたわけであろうか。それは当初の水利構造が思いつきの技巧による局所的設計であったほか、庄屋時代このかた管区を異にする野田、廿枝大埇、篠原などが、後免を中心に相接しながらも互に国境をこえての手出しが困難であって、今日のように全地域を見渡しての合理調整的な開発処理ができなかったからだ。

この一方では指導階層の権力的ながんこさにならされた農民たちは、タブー的水利信仰となって寸分の水利変更を考えることはできなかった。この気分は尾をひいていまに遺されているのかもしれないが、上述した諸因の結果が、時代けいかのうちに後免をして水のわざわいと葛藤との雑居する国境の町たらしめた。明治時代となっても水利運営の基本線には何の変りもなかった。それというのは、すこしの狂いも双方利害の鋭敏さから論争の激突となったからだ。だから開拓当初からの伝承水利に対して、「ツックな触れな、サワラヌ神にたたりなし」と一歩半歩の前進はもとより、前向くことは思いもよらずかくて三百余年の時代はこれを尻目に推移しかっての清新明朗な町も国境での立すくみのままで、現在の状態におちいってしまった。

◇後免周辺の水路や道路の不整形態な現状は、開拓当初に系統的な全域の計画がなかったことを物語っている。これは一般的にも同様であって、時代の要請から先進地方が盛に区画整理に努力を傾けているのはこれがためである。後免周辺においては、新川通水をともに開田ブームに駆りたてられ、開拓に取残されていた洪積台地の末端部に挑み、自然の起伏に応じて水路を通じ一意水田化を急いだ。当時の開拓手続きは省略するが許可された幾人かの有力者の限定区域があって、それぞれ開拓完了の期限が附せられていた。

この開田区域の分割限定は細部工事の不統制となり、期限は附帯工事の軽視となったであろう。（未完）

句集　南国

小松六居選

雨はげし蔟塚に音なくそゝぐ　稲生　前田昭子
評＝蔟塚の孤独がいたはわれている。

無口なる夫マスクしてなほ言わず　国府　川村比路
評＝不機嫌ではない。唯、うなずくだけの愛情の表現である。

子山羊らに新藁敷かれ嫁さん来る　岩村　大島新草
評＝新米の香がぷんぷんする。

寒いから仕事着のままわれ酔う　大埇　山中日爽
ひそかにも雨降りいでて夜業妻　稲生　井上成壽
冬枯れの堤クレーンの朱を残す　国府　小松芙美
宵市の裸灯に葱の香り満へ　岩村　甲藤悦子
生涯の枯野かゞやき夫婦耕す　岩村　和田ひでみ
いっせいに風船あがり天高し　稲生　浜田とし子
冬山のすぐ消ゆ虹よ誰に告げん　岩村　油　きち
野火離し怯まず云ふ女の肩　前田紫月
産みの母恋ふ新藁の香にひたり　浜改田　中村祭生
炭俵をあむ山の生活に余技もなく　後免　磯崎政子
頭に散りくる十一月の紅葉濃し　稲生　北村菊女
蔟塚はねずみの宿よあたたかし　稲生　浜田豊子

東工高校開校記念俳句大会

日時　三月三日（日）午後一時より
場所　東工業高校内
投句　参加希望者は来る二月二十八日迄に当季雑詠五句に会費百円（写真代郵送費を含む）を添へて左記宛申込みのこと
南国市大埇　西岡双島子
選者　北村淙々子、小松六居、池祐章、公文東梨
賞　優秀句五句に賞状及び賞品
主催　南国市民俳句会
協賛　南国市教委　東工業高校

俳句募集

次回選者　北村淙々子
締切　二月末日
送付先　南国市役所内　広報委員会
次々回選者　池　祐章
締切　三月二十日

高級御誂服とレデイメード替ズボン
西田洋服店
後免中町（相銀前）電話3063
有線　155—13

…住宅金融公庫…
申込から設計・施工・登記までご報次第参上します
中村建築士事務所
南国市小籠五七
南国市大埇
連絡事務所　吉本肥料店内TEL361

養鶏・養豚・酪農
飼料はニツコー完全飼料
一月～四月初雛用予約割引
県下特約店　吉本飼料店
大埇　TEL 361　有線 ⑬—3
ゲージ、給餌器、給水器

ヒヨコ
春ビナ予約受付中
高級　白レダ　正交配ロックホーン
三元交配ネックホーン・ゴールデンネック
後免西町　TEL267　嶺南ふ化場

毛糸
トーア、スキー
ローレル、カネボー
後免西町　富士屋百貨店
TEL248